



3学期の始業式に、書道ライブで書いたことばです。人生いろいろで前向き・肯定的に考えることが辛いときもありますが、でもね……。休んでもいいし、一步一步ゆっくりでもいいから前に進んでほしい。その願いを込めました。へびは、脱皮しながら新たな自己を生み出すことから成長の象徴とされています。文字の中にへびを盛り込んでいますので、探してみてください。



ジャンヌ・ダルクが舞い降りた日

〈全日本アンサンブルコンテスト〉
～吹奏楽部中国大会 鑑賞記～



ジャンヌ・ダルクの生涯に興味があり、本校の図書館にある『ポプラ社 ポプラディアプラス人物事典』を読んでみました。軍人かつ革命家?くらいの知識しかなかった私は、そこで驚愕の事実を知りました。以下、自分なりにまとめたものです。

「1412年にフランス北東部の農家で生まれたジャンヌ・ダルクは、13歳のときから神の声が聞こえるようになり、そのおかげにしたがってフランスをイギリス軍から救う活躍をした。しかし、1430年にイギリス軍に売り渡され、神を冒涇した罪や男装で儀式に参加したなどの罪に咎められ、火刑に処せられた。1456年に彼女の裁判の判決が無効であると宣告された後の464年後、時のローマ教皇は彼女を聖女に列した。」

私は、吹奏楽部の打楽器八重奏「ジャンヌダルク～8つの打楽器群のための～」の演奏に3回(文化祭、大会前日のリハーサル、中国大会本番)立ち会いましたが、先日のとりぎん文化会館大ホールにおける演奏は、その歴史的背景を知ってから拝聴したためか、舞台にジャンヌ・ダルクが舞い降り、軍の先頭に立って戦っている虚構を見た気がしました。

オレルアンの戦い、宗教裁判から火刑に至る彼女の生涯を、本校の部員8名は全身全霊で表現しました。そして、祈りにも似た最後のドラが鳴りやんだ瞬間、全身に鳥肌が立ったのを覚えています。あらためて、吹奏楽部の皆さん、大いなる挑戦お疲れさまでした。結果は堂々の銀賞。

法中にあらたな伝説が生まれた日でしたね。

大村はま先生が遺されたことば

==大村はま==

教育関係者ならば、ご存知の方も多いと思います。高校・中学校の国語教師として、74歳で退職されるまで子供たちに「ほんもの」のことばの力をつけるために努力されてきたプロ中のプロです。私自身も、学生時代に著書を読み、教師としての道を徹底づけていただけただ心の師とも言える方です。それから何十年も時を経て。

先日、本校の職員から一冊の本を紹介されました。タイトルは『灯し続けることば(大村はま著 小学館)』。懐かしさとともに新鮮な気持ちになったことばがあります。

「力は使い切ったときに伸びるものです」今、最後の追い込みで受験勉強をがんばっている3年生をはじめ、皆さんで共有したいことばでした。



生徒の名作



片山友貴さん

盆の日にひらひら後ろをついてくる その蝶々は誰だろう (友貴)

第13回山上憶良短歌賞に応募された2年生片山友貴さんの作品が、3071点の中から厳選な審査の結果、みごと入選されました。おめでとうございます!

皆さんでいっしょに、この「秀作」を鑑賞しましょう。(上記)